

2023年3月19日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書15章～20節

説教題：イエスを王とするなら…

2004年、20年前になりますが、「パッション」という映画が評判になりました。ゲッセマネの園から十字架まで、イエス様の最後の12時間を忠実に描いていると言われる映画です。ご覧になった方もおられると思います。アメリカ映画ですが、イエス様役の人も、弟子達役の人も、当時、実際に人々が話していたアラム語で話すのです。それだけでも、興味をそそられる映画ですが…。この映画を見ると、十字架刑がどんなに惨たらしい刑か、イエス様がどんなに激しい苦しみを経験されたか、それが良く分かります。(機会があられたら、ご覧になられると良いと思います)。特に十字架に架けられる前のローマ兵による鞭打ちが、見るに堪えません。背中から血が噴き出し、背中肉、脇腹の肉が引きはがされる、そういう感じです。「パッション」を作ったのは、メル・ギブソンという監督ですが、彼は監督をしながら一箇所だけ自分も画面に出ているのです。といっても、手だけです。イエス様を十字架に釘付けにするために釘を打つ、その釘を打つ手の役を自分でやっているのです。自分の罪がイエス様を十字架に架けた、私のためにイエス様は十字架に架かって下さった、そんな思いで彼が「パッション」を作った、それが伝わって来るエピソードです。

さて、今日の箇所は、その「鞭打ち」の場面を含む箇所ですが、「マルコ」は、イエス様がどんな酷い目に遭われたか、そんなことは書かないのです。では「マルコ」は、何を伝えたいのか、そのことを考えて行きたいと思えます。「内容」と「メッセージ」に分けてお話し致します。

1. 聖書の内容～裁かれる主イエス

イエス様は、ゲッセマネの園で逮捕された後、まず大祭司の屋敷で開かれた即席の「最高議会」で裁判を受けられました。そこで最高議会は、イエス様に死刑の判決を下しました。しかし(先日も申し上げた通り)、当時、ユダヤ自治政府である最高議会には、囚人を死刑にする権限はありませんでした。それはローマから派遣されたユダヤ総督が持っていました。そこでユダヤ最高議会のメンバーは、イエス様を総督ピラトの所に連れて行くのです。そしてピラトに裁いてもらおうとするのです。

ピラトはイエス様に尋ねます、「あなたはユダヤ人の王ですか」(2)。{この辺りは「新共同訳」の方が実際の様子を良く再現していると思います。「新共同訳」では「お前はユダヤ人の王なのか」(2)と訳しています。ユダヤ最高議会では、大祭司はイエス様に「お前はほむべき方の子、メシアなのか」(新共同訳61)と聞きました。そして、イエス様を「自分を神の子と自称した」ということで死刑に決めました。ところが、ローマ人であるピラトにとっては、ユダヤ人の宗教の問題は、どうでも良いことでした。ピラトは「それはユダヤ自治政府の仕事だ」と言って宗教問題には関わらない。ユダヤ人の指導者達はそれを知っていたので、イエス様を訴えるのに「彼は自分を神の子だと自称した」というような罪状では訴えなかったのです。「ユダヤ人の王と自称した」と訴えたのです。それならば、ピラトが関わらざるを得ない政治問題です。何人であれ、ローマの許可(同意)なく勝手に「王」となることをローマは赦さないからです。さらに3節には「イエスをきびしく訴えた」(3)とありますから、「彼は騒ぎを起こす者だ、治安を乱す者だ、カイザルに税金を納めないように扇動する者だ…」、祭司長達、議会のメンバーは、そういうことを諸々訴えたのでしょう。それでピラトは、イエス様に「お前はユダヤ人の王なのか」と聞く。それに対してイエス様は「そのとおりです」(2)と答えられます。その後は、沈黙を守られるのです。

(6節から後に行きます)。イエスは沈黙を守られますが、その裁判の席で声を上げる人がいます。群衆です。群衆がやって来て「祭りの度ごとに行われている恩赦を実施して欲しい」と訴えるのです。彼らは「暴動の時に人殺しをして投獄されていたバラバ」を釈放するように要求します。10節を読むとピラトは、祭司長達の計略によってイエス様が訴えられていることに気づいていません。それで、祭司長達の言いなりになってイエスを裁きたいとは思わなかったようです。しかし、祭司長達の言うことを全く無視することは出来ない。祭司長達には「ピラトのユダヤ支配の不手

際をローマの中央政府に直訴する」という奥の手がありました。大祭司は、ローマで一定の影響を持っていたようです。ピラトとしては、それをされると自分の経歴に傷が付きます。そこで、「恩赦の制度」を用いてイエスを釈放しようと考えます。

「バラバ」という男は、恐らく愛国主義的な暴力革命家でした。熱心党の一員だったかも知れない。(現代のテロを行う原理主義者のような者でしょう)。それだけにローマに反感を持っている国民には、恐らく人気があったのです。彼の名前は「イエス」だったと言われます。正式名は「バラバ(ハル・アバ父の子)の短縮形・イエス」と言ったとされています。「父の子」というのですから、「尊父」と仰がれる宗教指導者の子供だったのかも知れません。また「イエス/イエシュア/ヨシュア」という名前は、当時ポピュラーな名前でした。いずれにしても、群衆はバラバのことを指して「イエスを、イエスを」と言って来たのかも知れません。「イエス」と聞いてピラトは「このユダヤ人の王を釈放してくれというのか」(9)と言うのです。しかし、この群衆は「バラバの反ローマ革命運動」に期待して、バラバの釈放を求めて来た人々だったようです。そのような人々が集まるように、祭司長達が手を打ったのかも知れません。それで「バラバ・イエス」ではなく「ナザレのイエス」が釈放される可能性が出て来た時、この群衆は激しく叫ぶのです。しかも「バラバ・イエスが釈放されるように」ということだけでなく、祭司長達から「ナザレのイエスを死刑にするように」叫ぶように扇動されていたのでしょ—(「イエスは神を冒瀆した」と聞かされていたかも知れません)。

結局ピラトは、群衆の声に負けるのです。ピラトにすれば、自分がユダヤを治めている間に、祭司長達に直訴されるのは困るし、また群衆に暴動を起こされるのも困るのです。自分の失点になります。だから、ある程度は群衆を宥めて治めざるを得ない。それで、そうやって群衆の声を聞いて、イエスを有罪として十字架につけることに同意するのです。

イエス様は、鞭打たれ、ボロボロになられたことでしょう。映画ではそうでした。さらに兵士達は、イエス様を「ユダヤ人の王様、万歳」と言って嘲弄するのです。イエス様が語られた受難予告—「人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、人の子を死刑に定め、そして、異邦人(ローマ人)に引き渡します。すると彼らはあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺します」(10:34)が現実になるのです。

2. メッセージ～主イエスを王とする

この箇所は、私達に何を語るのでしょうか。イエス様の言葉に帰って考えたいと思います。ピラトはイエス様に聞きます。「お前がユダヤ人の王なのか」(新共同訳 2)。それに対してイエス様は「そのとおりです」(2)と言われますが、原文では「あなたが言った」です。それで「新共同訳」は「それは、あなたが言っていることです」(新共同訳 2)と訳しています。「新共同訳」の訳の方が原文に近いということになります。しかし分り難いです。「メッセージ訳」という聖書は、マルコの意を汲んで、もう少し分りやすくこう訳します。「あなたがそう言うなら、そうです」(メッセージ訳 2)。どういう意味でしょうか。

この箇所を読んで気づくのは、ここに「ユダヤ人の王」という言葉が4回も出て来るということです。それぞれの人がそれぞれの使い方をします。2節のピラトは「こんな男がユダヤ人の王か」と皮肉を込めて使っているかも知れません。9節や12節では、ピラトは、ユダヤ人指導者達に対するあてつけとして、イエス様のことを「ユダヤ人の王」と言っているかも知れません。また18節の兵士達は、イエス様をバカにしながら「ユダヤ人の王」とからかいます。しかし、イエス様は言われます。「あなたがそう言うなら、そうです」。ピラトは、そんなに深い意味を込めて言っているのではないかも知れません。またイエスを「王だ」等と思って言っているのではないかも知れません。しかしイエス様は、真実の意味においては王なのです。「ユダヤ人の王」であるだけではなく、「世界の王の王」です。そして、そのイエスが言われる。「あなたがそう言うなら、そうです—{私は(あなたの)王です}」。そしてマルコが「ユダヤ人の王」という言葉を4回も書き留めた意味、それは読者に「あなたはイエスを誰だとするのか。真実の意味でイエスを王とするのか」、そう問いかけているのだと思うのです。しかも「ユダヤ人の王」と言われているその意味

は、私達の生きる現実からかけ離れたような、現実の政治からかけ離れたところで「王」だというのではなく、私達の生きているこの現実の社会の中において、私達はイエスを「王」とするのか、それが問われていると思うのです。誰かを「王」とするという概念は、もう1つ、私達には身近ではありませんが、それは、現実の中で、その方に信頼を置き、従い、献身を捧げ、仕えることでしょう。三浦光世さんが妻の綾子さんに言った言葉が心に残っています。綾子さんが「氷点」を1年かけて書いて来て、もうすぐ完成という時、締め切り日が迫っていたので、彼女は光世さんに頼みました。「毎年子ども達を集めてのクリスマス会を今年だけは延期したい」。光世さんは言いました。「神の喜び給うことをして落ちるような小説なら書かなくて良い」（三浦光世）—(凄いな言葉です)。神を「王」とするという事は、こういうことかも知れません。

戦前の日本では、キリスト者は—(分かり易く言うと)—「天皇を『王』とするのか、イエス・キリストを『王』とするのか」と問われたそうです。礼拝の最初に、皇居遥拝と言うのでしょうか、神様を拝む前に、天皇を拝まなければならなかったそうです。ある人々は「日本的キリスト教」ということを言い、「天皇を礼拝することとイエス・キリストを礼拝することは、次元の違うことなのだ、矛盾しないのだ」と言って妥協を図ろうとしたのです。もちろん当時のクリスチャン達にも、大変な戦いがあったことでしょう。安易に批判することは出来ませんが…。

話を元に戻しますが、この箇所は、「現実的なことと霊的なことを区別する、イエス・キリストと地上の王とを次元の違うところに置く」、そういう信仰を意図してはいないと思います。ここでイエスは、現実社会の「王」として裁かれている。マルコは、その意味での「王」という言葉を何度も何度も使うのです。その意味で、この箇所は私達に「あなたは生きる現実においてイエスをあなたの「王」とするか」、そう問い掛けるのです。平和な時代は良いです。しかし国家の体制が、戦前のようなことになった時、キリスト教は国粋的な政治とぶつかるかも知れません。しかしそれは、キリスト教が時代の価値観に左右されない神の真理として存在しているからです。その真理を不都合とする時の権力の方がおかしいのです。戦前、キリスト教を弾圧した権力も、国家の政策に迎合したキリスト教の一部の勢力も、戦後「自分達の間違いだっ」と認めざるを得なかったのです。真理だから、私達はイエスを「王」とするところ、そこに立つ価値があるのです。私達は、平和な時代から、「イエス様が私の王である」ということ、「誰に何を言われようとも、これは譲れない」という、その覚悟を育てる必要があるのではないのでしょうか。イエス様は言われるのです。「あなたが私を『王』とするなら、私はあなたの『王』である。『王』として、あなたを守る」。

しかし、この箇所は「イエスを『王』とする」ことについて、さらに踏み込んで語っていると思います。それは、イエス様を「王」として生きるということは、具体的には、例えばどうすることなのかということなのです。

イエスは黙っておられます。ピラトは驚きます。彼は裁き人として「訴える者も訴えられる者も、一生懸命自分の義を主張する」、そういう裁判に慣れていたでしょう。しかし、イエスは黙っておられる。その代わりに回りの者がイエスを裁いて声を上げるのです。祭司長達は、イエスのことを「死刑にあたる」と裁きました。そして、ここでイエス様のことを色々と訴え出ます。群衆も「十字架につける」と裁きました。いや、群衆こそ、裁きました。イエス様の回りにいる全ての者が裁いているのです。なぜ、皆が裁くのか。なぜ人々は裁くのでしょうか。

私達の日常にこの問題を置き換えると、私達も—(「私も」と申し上げるべきかも知れません)、身の回りの人を「あの人は、〇〇だ」と裁くのではないのでしょうか。私はそうなのです。だから、私は自分に向かって言わざるを得ないのですが…。なぜ私は—(「私達は」と言っても良いのでしょうか)—対人関係において人を裁くのでしょうか。それは、何よりも「自分が正しい」と思うからでしょう。それは多くの場合、事実かも知れない。あるいは、誰かの不条理な言動に対する怒りかも知れません。しかしそれだけでなく、私達は、心の深いところで、無意識かも知れませんが、誰かを裁くことによって、裁いている自分が某かの優越感を覚える、そういう面があるのではないのでしょうか。この民衆の姿と自分の姿とが、何か重なるような気がします。皆様はいかがでしょうか。

しかし、イエス様は、何とも言わずに黙っておられます。なぜ無実を主張されないのでしょうか。それは、イエス様は、ピラトの裁判を受けておられるのではないのです。ピラトの裁判を通して、神の裁判を受けておられるのです。人の—(私達の)—罪を背負って神の裁判を受けておられるのです。その神の裁判において、私達の罪を背負っておられるイエス様は、反論出来ないのです。私達の罪の一切を背負っておられるから、イエス様は無実ではない、有罪なのです。イエス様は、ここで、ただ祭司長達の、群衆の、ピラトの愚かさを嘆いて沈黙されているのではないのです。ここで、私達のために神の裁きを受けておられる、だから沈黙されているのです。そうやって、実は裁かれるべき私達が赦されるのです。神がイエス様によって私達の罪を赦して下さっているのです。

私達がイエス様を「王」とするということはどういうことか。それは、例えば、私達が、「私は、私が『王』と仰ぐイエス様に、私の罪の罰のために死んでもらった者である、イエス様によって罪を赦してもらった者である」というところに、立つということではないでしょうか。しかし、それは消極的なことではない、素晴らしいことなのです。あのペテロの後の大きな働きは、どこから出て来るのか。彼が自分の罪を自覚したところから—(「イエス様に罪を赦してもらったのだ」と思うところから)—出て来るのではないのでしょうか。ヨハネは、「雷の子」と呼ばれるくらい激しい人でした。でもヨハネも、後に「愛の使徒」と呼ばれました。「自分の罪を自覚したところ、イエス様にそれを赦してもらったことを自覚したところから始まった変化だった」と思うのです。

私達も「私は、ただ『王』なるイエス様に、一切の罪を赦して頂いた存在である」ということを忘れてはいけません。私達が、その罪を神様に赦されるために、じっと沈黙を守っておられるイエス様の姿を忘れてはいけません。それが、色々な形で私達の生き方を変えて行くのです。それは例えば、「安易に隣人を裁かない」という生き方となっても現れて来るのかも知れないと思うのです。

3. 終わりに

イエス様は、私達に変わって鞭打たれ、裁きに耐え、十字架を忍んで下さいました。「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」(ヘブル 9:27)。本来は、私達が受けるべき罰でした。しかし私達は、イエス様の受けて下さった裁きによって、もうどんな裁きも恐れる必要はなくなったのです。全ての罪を既に赦され、「神の子」にまでされているのです。どんな時にも、神の愛と配慮を信じ、神様に、イエス様に、期待することが出来るのです。その特権を下された神様が、イエス様が、私達に求めておられるのは、私達がイエス様を、「王」とすることなのです。イエス様を「私の王」として、いつも心の深いところにお迎えしましょう。